

熊本地震から学んだこと

高橋 毅[†]第73回国立病院総合医学会
(2019年11月8日 於 名古屋)

IRYO Vol. 75 No. 3 (253-255) 2021

要旨

国立病院機構熊本医療センター（当院）では20年以上前より、毎年10月に、「熊本地方で震度6の地震が発生した」という想定の下に、短時間に多数傷病者100名以上を受け入れる災害訓練を行ってきた。くしくも平成28年4月14日の熊本地震は、まさに、いつもの訓練想定どおりの震災となり、約350名の職員が自主参集し、いつもの訓練と全く同じように対応し、翌日までに約150名の傷病者を受け入れ、完璧に近い対応ができた。ただ1つの誤算は、その2日後に本震が来たことであった。

本震でも400名以上の職員が、ほぼ2日連続徹夜の状態です自主参集し、再び災害対策本部を立ち上げ、傷病者約300名を無事受け入れた。この時点での最大の問題は、職員全員が疲労困憊し、これ以上の受け入れが危ぶまれたことである。この危機を救ってくれたのは、DMATではなく、機構本部が派遣してくれた初動医療班であった。

これらの経験を総合して、「南海トラフ地震への備え」として、私が熊本地震から学んだことを報告する。

1. 毎年の多数傷病者受け入れ訓練が功を奏した。全職員がパターン化して体得していた。
2. 災害訓練は実際におこりうる厳しい被害想定で行うことが重要。
3. 震度6強～震度7は家屋を破壊する。6弱までは大丈夫。
4. 連続災害発生の可能性も考慮して、人員もシフト化する。
5. 職員は医療者としての使命感が強いので、極力休ませるように。
6. 国立病院機構本部からの支援は素晴らしかった。熊本県への貢献も素晴らしかった。
7. 機構の初動医療班・医療班はfirst choiceで機構病院へ来てくれるので助かった。
8. 機構病院からのDMAT派遣は慎重に、最初は初動医療班の派遣がとても重要になる。
9. 取引のある全国規模のSPD業者が医療材料・食料・物資の支援をしてくれ助かった。

キーワード 国立病院機構初動医療班、災害訓練、熊本地震

はじめに

国立病院機構熊本医療センター（当院）では20年以上前より、毎年10月に、「熊本地方で震度6の地

震が発生した」という想定の下に、短時間に多数傷病者100名以上を受け入れる災害訓練を行ってきた。くしくも平成28年4月14日の熊本地震は、まさに、いつもの訓練想定どおりの震災となり、約350名の

国立病院機構熊本医療センター [†]医師

著者連絡先：高橋 毅 国立病院機構熊本医療センター 院長 〒860-0008 熊本県熊本市中央区二の丸1-5

e-mail: t99@horn.xsrv.jp

(2020年3月19日受付, 2021年2月19日受理)

Lesson Learned from the Kumamoto Earthquake

Takeshi Takahashi, NHO Kumamoto Medical Center

(Received Mar. 19, 2020, Accepted Feb. 19, 2021)

Key Words: NHO emergency medical team, disaster medicine, Kumamoto Earthquake